Departure OC I Revised Edition

しくみがわかれば聞き取れる

朝尾幸次郎

昭和の始め頃の横浜の波止場。埠頭にはアメリカの貨物船が停泊している。岸壁ではアメリカ人船員がクレーンで降ろされようとしている大きな積み荷を指さし，大声で指示を与えている。積み荷の下には荷下ろしを行う日本人沖仲仕（おきなかし）が待ちかまえている。そのひとりが感心したように言った。

「見ねえ。このアメリカ人，なかなかのやつだぜ。日本語ができる。それも下町ことばだ。《でっけえ，でっけえ》って言ってるぜ」

■文になると聞き取れない

アメリカ人船員が声を張り上げて言っていたのは “Take care! Take care!”（気をつけろ）だった。この話には英語のじょうずな発音，リスニングの秘訣が隠されている。吹き替えなしのアメリカ映画を見て，英語が聞き取れず愕然とした経験のある方は私だけではないだろう。後で，映画のスクリプトを手に入れて読んでみると，聞き取れなかった英語は実は知っている単語ばかりだったことがわかってもう一度，愕然とする。私たちが耳にする英語は単語でなく，単語が連続する文だ。句や文になるとそこに音変化が生じ，単語単独での音のイメージとは異なったものとなる。この音変化こそ，発音，リスニングの決め手である。

長くアメリカで生活し，高校生のとき日本に戻ってきた生徒が日本語で苦労した体験を話してくれた。家では日本語を使っていたので，話したり，聞いたりすることに不自由はない。漢字も知っている。しかし，日本語を読もうとするとつまずいてしまう。それは「事業再生計画案」や「木造校舎再利用計画」のように漢字が連続する表現だ。どこに切れ目があるのかわからないのだという。私たちが映画の英語を聞いて聞き取れないのはこれによく似ている。単語の切れ目がわからない。

タレントのタモリは上京するまで福岡にいて，当時，FEN とよばれていた駐留米軍放送をよく聞いていたそうだ。FEN でいち早く流されるアメリカの最新ポップスを聞くためだ。曲が流れる前後で番組の司会者が「引っ張れー」と言っている。この「引っ張れー」とはいったい何のことか，長い間，疑問に思っていたそうだ。それがわかったのはずいぶん後になってからのことで，それは “Hit parade”（ヒット・パレード）だった。

■フレーズと文で練習する

映画 *Titanic* に次のような場面がある。望まぬ結婚を控えたローズが船尾の手すりを越えて海に飛び込もうとするのをジャックが止める。そのときのローズのことばである。

Stay where you are. I mean it. I'll let go.
（来ないで。本気よ。手を離すわよ）

単語はやさしいのに英語を聞くととまどう。

リスニング，発音を練習する場合には単語でなく，フレーズや文で練習するのが効果的だ。上の例では mean it と let go をまとめて練習するとよい。フレーズや文で練習すると，単語として理解している音がどのように変化するかがわかる。

単語の音が音連続のなかでどう変化するかを実感するにはカタカナで表記してみせるのも効果的だ。生徒に次のように聞いてみる。「これは英語

の発音を聞いたとおりに日本語で書き表したものです。それぞれなんという英語でしょうか」

ペケタプ　/　テナクラク　/　ナタトー

（答えはこの記事の最後をごらんください）

■「しっかり聞こう」は効果がない

私たち日本人に苦手な英語の音があるように，日本語を学ぶ外国人にも苦手とする音がある。「つまる音」とよばれる「促音」がその例だ。外国人にとっては次の単語は聞き分けるのがむずかしい。

せけん（世間）　　せっけん（石けん）

まち（町）　　マッチ

また，伸ばす音も外国人は苦手だ。

おじさん　　おじいさん

スーパー　　スパ（温泉）

これを練習するのに「しっかり聞きましょう」と励ましても効果は少ない。「せっけん」では2拍目は音がそもそも消えているのだから聞き取りようがない。私たちも「っ」だけを単独で取り出して発音することはできない。促音も長音も日本語の拍というリズムのなかで意味をもつからだ。日本語のしくみを理解しなければ聞き取れない。英語も同じで，“Hit parade” を聞き取るためには，破裂音と破裂音が連続する環境では hit の語尾子音［t］は破裂しないことを知っておかなければならない。

■しくみを理解すると効果的

英語の発話で元来の単語の発音が変化するものに機能語の弱形がある。代名詞 his は発話のなかでは［h］の音が落ち，弱い音になることが多い。このような音変化も聞き取りがむずかしい。

弱形の聞き取りについて効果的な練習法を調べるのに次のような実験をしたことがある。教える時間はどれも同じにして，3つのクラスでそれぞれ次のような違った教え方をしてみた。

Aクラス　説明はせず，テープを繰り返し聞かせる。

Bクラス　テープは聞かせず，弱形では音の形が変わることを説明する。

Cクラス　弱形では音の形が変わることを説明し，同時にテープを聞かせる。

その後，弱形を含む英語の文を使い，同じ書き取りテストを行って成績を比べてみた。すると，成績の伸びがみられたのはBとCのクラスであった。なかでも，弱形の解説をしてテープで音声を聞かせたCクラスの伸びは大きかった。

とりわけ私が興味深く思ったのはBクラスである。このクラスでは音声は聞かせなかった。文のなかでは代名詞や助動詞などは弱い音になり，［h］などが落ちて音の形も変わるということを日本語で説明しただけだ。なのに，音声をひたすら聞かせたAクラスよりずっと好成績だった。音声を聞く練習をせずに聞き取りの成績をぐんと上げることができたのだ。

大学生のとき，音声学の授業で king などの語尾子音［ŋ］について学んでいたときのことだ。先生が次のようにおっしゃった。「最近の若い人は日本語で鼻濁音を使わなくなりましたね。朝尾君，君は鼻濁音と濁音のどっちを使いますか」私は答えることができなかった。自分がどの発音をしているかわからなかったのだ。その後，「考える」に出てくる音が鼻濁音だとわかり，繰り返し「考える」と発音してみることで，鼻濁音をはじめて意識することができた。音のしくみを知れば音を意識化でき，区別できるようになる。

＊　＊　＊

Departure OC I Revised Edition にはレッスンごとに Pronunciation Skills という発音練習がついている。Teacher’s Manual には音のしくみについてわかりやすい解説がある。どちらも教室での実践から生まれたものだ。CD を聞かせるとき，音のしくみについてひとこと説明を加えると生徒の聞き取りの力はぐんと伸びるだろう。

（答え：pick it up / ten o’clock / not at all）

（あさお　こうじろう・立命館大学教授）